都響およびバルセロナ響の音楽監督、新国立劇場オペラ芸術監督。1987年トスカニーニ国際指揮者コンクール優勝。これまでに、ザグレブ・フィル音楽監督、都響指揮者、東京フィル常任指揮者（現・桂冠指揮者）、カールスルーエ・バーデン州立劇場音楽総監督、モネ劇場（ベルギー王立歌劇場）音楽監督、アルトゥーロ・トスカニーニ・フィル首席客演指揮者、フランス国立リヨン歌劇場首席指揮者を歴任。フランス批評家大賞、朝日賞など受賞多数。文化功労者。2023年３月まで３年間、都響音楽監督の任期が延長された。

2017年５月、大野和士が９年間率いたリヨン歌劇場は、インターナショナル・オペラ・アワードで「最優秀オペラハウス2017」を獲得。自身は2017年６月、フランス政府より芸術文化勲章「オフィシエ」を受章、またリヨン市からリヨン市特別メダルを授与された。2019年７～８月、大野和士が発案した国際的なオペラ・プロジェクト「オペラ夏の祭典2019-20 Japan↔Tokyo↔World」の第1弾『トゥーランドット』の上演が実現。東京、大津、札幌における計11公演を自ら指揮して成功に導き、大きな話題を呼んだ。

Kazushi Ono is currently Music Director of Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra, Music Director of Barcelona Symphony Orchestra, and Artistic Director of Opera of New National Theatre, Tokyo. He was formerly General Music Director of Badisches Staatstheater Karlsruhe, Music Director of La Monnaie in Brussels, Principal Guest Conductor of Filarmonica Arturo Toscanini, and Principal Conductor of Opéra National de Lyon. He received numerous awards including Palmarès du Prix de la Critique, Officier de l'Ordre des Arts et des Lettres, and Asahi Prize. He was selected to be a Person of Cultural Merits by the Japanese Goverment. TMSO announced that the term of Ono as Music Director was prolonged until March 2023.

A Series

第884回 定期演奏会Aシリーズ
Subscription Concert No.884 A Series

東京文化会館

2019年9月3日(火) 19:00開演
Tue. 3 September 2019, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

B Series

第885回 定期演奏会Bシリーズ
Subscription Concert No.885 B Series

サントリーホール

2019年9月4日(水) 19:00開演
Wed. 4 September 2019, 19:00 at Suntory Hall

指揮 ● 大野和士 Kazushi ONO, Conductor
ヴァイオリン ● ヴェロニカ・エーベルレ Veronika EBERLE, Violin
コンサートマスター ● 四方恭子 Kyoko SHIKATA, Concertmaster

【若杉弘没後10年記念】

ベルク：ヴァイオリン協奏曲《ある天使の想い出のために》(26分)
Berg: Violin Concerto, "Dem Andenken eines Engels"

Ⅰ Andante - Allegretto
Ⅱ Allegro - Adagio

休憩 / Intermission (20 分)

ブルックナー：交響曲第9番 二短調 WAB109 (ノヴァーク版) (60分)
Bruckner: Symphony No.9 in D minor, WAB109 (Nowak edition)

Ⅰ Feierlich, misterioso
Ⅱ Scherzo: Bewegt, lebhaft
Ⅲ Adagio: Langsam, feierlich

主催：公益財団法人東京都交響楽団
後援：東京都、東京都教育委員会
シリーズ支援：明治安田生命 (4日)
助成：文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

※ベルクのヴァイオリン協奏曲サブタイトルについて

曲名の細部にまで気を配った若杉弘氏に敬意を表し、本日のプログラムでは、氏が音楽監督を務めていた当時の表記に従い《ある天使の想い出のために》とします。

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

Veronika EBERLE

Violin

ヴェロニカ・エーベルレ

ヴァイオリン

©Felix Broede

南ドイツ生まれ。クリストフ・ポッペン、アナ・チュマチェンコらのもとで研鑽を積む。2006年、わずか17歳でラトルの指名を受けザルツブルク復活祭音楽祭に登場、ベルリン・フィルとベートーヴェンの協奏曲を弾き、注目を集めた。以後、ハイティンク、ギルバート、ナガノ、ヤノフスキ、P. ヤルヴィ、ネゼ＝セガンらに招かれ、ロンドン響、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ニューヨーク・フィル、モントリオール響、ベルリン放送響、チューリヒ・トーンハレ管などと共演。室内楽にも積極的で、フォークト、R. カプソン、タメスティらと共演を重ねている。

稀有な才能と安定感のある成熟した技術は、世界中から賞賛されている。都響とは2017年11月以来２度目の共演。使用楽器は日本音楽財団から貸与されたストラディヴァリウス「ドラゴネッティ」（1700年製）。

Veronika Eberle's exceptional talent, the poise and maturity of her musicianship have been recognised by many of the world's finest orchestras, venues and festivals, as well as by some of the most eminent conductors. She was born in Donauwörth, Southern Germany. Her introduction by Rattle to a packed Festspielhaus at 2006 Salzburg Easter Festival, in a performance of Beethoven concerto with Berliner Philharmoniker, spurred her international career. Eberle plays the "Dragonetti" Stradivarius (1700), on generous loan from the Nippon Music Foundation.

ベルク：
ヴァイオリン協奏曲《ある天使の想い出のために》

「私がいなくなっても、きっと大丈夫、お母さんは、なんだって平気で乗り越える人じゃない」――そう言って、18歳のその少女は息をひき取った。母の心の痛みは癒えることがなかったという。

少女の名は、マノン・グロピウス（1916～35）。作曲家グスタフ・マーラーの妻アルマ（1879～1964）が、マーラーの没後に結婚した建築家ヴァルター・グロピウスとの間にもうけた子だ。小児麻痺にかかり、1年以上も苦しみぬいた末の死だった。その「天使のように美しい」（指揮者ブルーノ・ワルター談）少女を、アルバン・ベルク（1885～1935）もたいそう愛し、1935年4月、訃報に接すると、創作中のヴァイオリン協奏曲をマノンに捧げるレクイエムとすることに決めた。

そしてそれは、夏には完成する。だが、衝撃的なことに、同年12月24日、ベルク自身も逝ってしまう。享年50。天使のためのレクイエムは、自らのためのそれともなってしまった……。

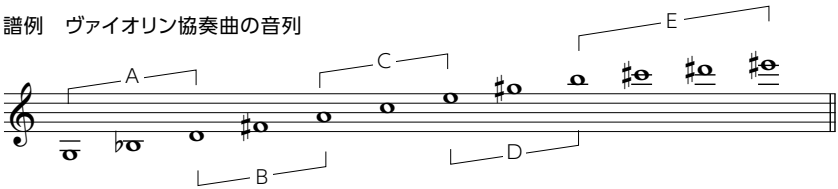
そもそも、この曲に着手したのは、ある外注がきっかけだった。注文主は、アメリカのヴァイオリニスト、ルイス・クラスナー（1903～95）。折しも、ナチスの台頭により、急進的な作風のベルクへの風当たりが強まり始めていた頃のことだ。報酬も悪くない。ならばということで、オペラ『ルル』の創作をも中断し、これを書いたのだった。

最初期のスケッチから、ベルクの反ナショナリズムのメッセージを読みとる研究者もいる。また、ベルクがひそかに愛した、マノンとは別の女性たちへの暗示がこの作品にひそんでいるとの見方もある。

ベルクの師、アルノルト・シェーンベルク（1874～1951）が始めた、いわゆる12音技法（1オクターヴに含まれる12音から成る一つの音列を作り、それをもとに楽曲を構成する）に、基本的にならった作品である。もっとも、ベルクは調性の「影」が感じられるように無調音楽を書いた人だから、師の作品に比べると、時にかなりロマンティックに聞こえるだろう。

第1楽章　アンダンテ～アレグレット　独奏ヴァイオリンが最初に鳴らす音は、この曲の基本音列を一つおきにとったもの。しばらくして現れる上昇旋律が、音列の全容（譜例）だ。動きが舞曲風になるところからが後半のアレグレットの部分。「愛らしい少女のイメージ」だという。楽章の終わりのほうでは、民謡の旋律も。スコアには「田園曲ふうに（come una pastorale）」との指示が見える。

譜例　ヴァイオリン協奏曲の音列



A（ト短調の主和音）、B（ニ長調の主和音）、C（イ短調の主和音）、D（ホ長調の主和音）を含み、調性を感じさせる響きが得られるよう設計されている。E（全音音階）は第2楽章後半で引用される讃美歌の冒頭4音と音程関係が一致している。

第2楽章　アレグロ〜アダージョ　病める少女の、死との闘争で始まる。いつしか静寂の中から讃美歌のメロディが独奏ヴァイオリン上に立ちのぼり、後半のアダージョの部へ。讃美歌は、J. S. バッハのカンタータ第60番から採られたもので、その歌詞「もう十分です。主よ、御心にかなうなら、私を解き放ってください……(Es ist genug! Herr, wenn es Dir gefällt, so spanne mich doch aus! ...)」が独奏ヴァイオリンの譜に記されている。なお、このメロディの最初の4音は、先の基本音列の最後の4音と同じく、全音音階を示している。終結部で、鎮められた魂は浄化を得る。

（舩木篤也）

作曲年代：1935年

初　　演：1936年4月19日　バルセロナ
ルイス・クラスナー独奏　ヘルマン・シェルヘン指揮

楽器編成：フルート2（第1、第2はピッコロ持替）、オーボエ2（第2はイングリッシュホルン持替）、アルトサクソフォン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、タムタム、ゴング、ハープ、弦楽5部、独奏ヴァイオリン

ブルックナー：交響曲第9番 ニ短調 WAB109（ノヴァーク版）

交響曲作家としてのアントン・ブルックナー（1824～96）にとって、最後の、しかも未完の交響曲となったこの第9番は、前作の第8番の第1稿が完成して間もない1887年に書き始められた。しかし創作はほどなく中断される。理由は、自信をもって完成させた第8番の楽譜を指揮者ヘルマン・レーヴィ（1839～1900）に送ったところ、演奏不能と批判されてしまったことにあった。初演をしてもらうつもりでいたこの尊敬する指揮者からの拒絶がブルックナーに与えた衝撃は大きかった。彼は着手していた第9番の創作を凍結し、第8番の大幅な改訂に乗り出すのである。それはさらに他の幾つかの旧作の交響曲の改訂作業にまで及

ぶことになった。こうして1890年に第8番の第2稿が仕上げられ、その前後には第3番や第1番が新しく生まれ変わることになる。

ブルックナーが再び第9番の創作に本格的に戻ってくるのは、やっとそうした作業がほぼ終わった後の1891年になってからのことだった。そして1894年11月30日までにアダージョの第3楽章までを完成させる。このアダージョに取り組んでいた時期、ブルックナーの体力はひどく衰え、筆がなかなか進まなかったようだ。そしてアダージョがほぼ出来上がった1894年11月12日のウィーン大学における和声学の講義において、彼は自分の交響曲第9番が第3楽章まで出来上がったこと、最初の2つは完全に仕上がったが第3楽章はまだ推敲が必要なこと、その第3楽章は自分の書いた最も美しい緩徐楽章で自身深く魅了されていること、そしてもしフィナーレが完成できないまま自分が世を去ったら旧作の《テ・デウム》をフィナーレとして代用してほしいことを述べている。

結局この機会がブルックナーにとって最後の講義となり、その後病気のためにフィナーレの作曲はしばらく着手されないままだった。ようやく1895年の5月下旬になってフィナーレに取り掛かり、力を振り絞りながら創作を進めていったブルックナーだったが、1896年10月11日ついに力尽き、フィナーレを完成することのないまま天に召される。この当日もベッドで作曲に取り組んでいたと伝えられている。

初演は作曲者の死後かなりたった1903年ウィーンにおいて、フェルディナント・レーヴェ（1865～1925）の指揮でなされているが、その際オーケストレーションなどはレーヴェの手で大幅に変更されていた。この初演にあたっては先述のブルックナーのウィーン大学における最終講義での“遺言”に従って、フィナーレとして《テ・デウム》が演奏されている。同じ年には初版も出されたが、これもレーヴェの改作（彼としては善意でやったことだったが）によるものであった。

この作品のオリジナルの真の姿が明らかにされるのは1932年まで待たなければならなかった。この年の4月2日ミュンヘンでジークムント・フォン・ハウゼッガー（1872～1948）の指揮で、前半にレーヴェによる初版が、そして後半にオリジナルが演奏されるという形で、原典の初演がなされたのである。

このオリジナル版はその2年後の1934年に国際ブルックナー協会の原典版（旧全集）としてアルフレート・オーレル校訂のものが出され、さらに1951年にレオポルト・ノヴァーク校訂のものが同協会の新全集として出版された。ブルックナー自身が改訂を行わなかった作品なのでオーレル版とノヴァーク版は実質的に同一で、以後は一般にノヴァーク版が広く用いられてきたが、2000年に新たにベンヤミン＝グンナー・コールスが校訂した版が全集版として刊行されている（2005年改訂）。

またブルックナーが残したフィナーレのスケッチをもとにした補筆完成版の作成

も1980年代のウィリアム・キャラガンによる版やニコーラ・サマーレとジュゼッペ・マッツーカによる版以来試みられている。特にサマーレ&マッツーカ版はのちにジョン・A.フィリップスとコールスの2人が加わって改訂がなされ、全集版にも組み入れられた（サマーレ、マッツーカ、フィリップス、コールス版＝SMPC版／以後も再検討と修正が続けられている）。その後もキャラガンやゲルト・シャラーらによって新たな補筆の試みがなされている。

しかしこうした補筆版フィナーレや作曲者の“遺言”である《テ・デウム》を最後に置く形で演奏される機会は限られており、完成された第3楽章までを演奏するやり方が今でも一般的だ。たとえブルックナー自身はこの楽章で曲を締め括ることを想定していなかったにしても、天国に昇るかのような浄化された美しい終結感を持つこのアダージョこそが彼の“白鳥の歌”にふさわしいと多くの人が感じるからだろう。本日もノヴァーク版による3楽章版で演奏される。

第1楽章　荘厳に、神秘的に　ニ短調　3つの主題を持つソナタ形式。第1主題部は原初的なトレモロによる響きの中での断片的な動機の点滅に始まり、幾つかの動機の反復でエネルギーを高めつつ、*fff*の威厳に満ちた複付点付きのユニゾンの動きで頂点を形作るという複雑な構成のもので、その緊張に満ちた厳粛な気分が楽章全体に広がっていく。

第2楽章　スケルツォ／動きをもって、生き生きと　ニ短調　原始のリズムの鳴動とも死の舞踏ともいえるような不気味なスケルツォ。対照的に嬰ヘ長調に転じる急速なトリオは精霊が飛翔するような不思議な軽妙さを持っている。

第3楽章　アダージョ／ゆっくりと、荘厳に　ホ長調　第1主題部は嘆きと祈りが交錯するような旋律で開始され、金管の神秘的な咆哮を挟んで、ブルックナー自身「生からの別れ」と呼んだというコラール風の下行動機（ホルンとワーグナーテューバ）へと続く気分の変化に富んだもの。変イ長調に始まる歌謡的な第2主題は奥深い情感を湛えている。これらを展開的に扱いつつ、旧作の引用とおぼしき楽句も盛り込みながら音楽は内面的に高揚していき、最後は第8交響曲や第7交響曲の一節も回顧して、浄化された響きのうちに消えていく。

（寺西基之）

作曲年代：1887～94年（第1～3楽章）
初　　演：レーヴェによる改訂稿／1903年2月11日　ウィーン
　　原典稿／1932年4月2日　ミュンヘン
楽器編成：フルート3、オーボエ3、クラリネット3、ファゴット3、ホルン8（第5～8はワーグナーテューバ持替）、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、弦楽5部

Program notes by Robert Markow

Berg: Violin Concerto, "Dem Andenken eines Engels"

I Andante - Allegretto
II Allegro - Adagio

Alban Berg: Born in Vienna, February 9, 1885; died in Vienna, December 24, 1935

In early 1935, Berg was approached by the Russian-born American violinist Louis Krasner with a commission to write a concerto, specifically one to help further the cause of twelve-tone music. Berg resisted, claiming he was not familiar enough with the violin medium. But a few weeks later came catastrophic news that stirred Berg to action. Manon Gropius, the eighteen-year-old daughter of Alma (Mahler's widow) and Walter Gropius (the famous architect), died from polio. Berg had loved Manon as if she were his own. He admired her, as did everyone else, for her intelligence, beauty, gentleness and talent. She had been chosen to play the role of an angel in Max Reinhardt's upcoming production of *Everyman* in Salzburg. "She never did play the angel," Berg lamented, "though she became one." Hence the Violin Concerto's subtitle, *Dem Andenken eines Engels* ("To the Memory of an Angel").

The concerto is laid out in two large parts, each further subdivided into two sections played without pause. The opening of the first movement is presumably meant to depict Manon in all her tenderness, sensitivity and elegance. The twelve-tone row upon which the concerto is based appears first in the solo violin in bar 15. The first nine pitches are arranged as a series of interconnected thirds, which lends the concerto much of its inherent lyricism within a twelve-tone environment. The second section (*Allegretto*) is marked to be played *wienerisch* (in a Viennese manner). Here is the lively and capricious Manon.

Tragedy strikes in the second movement. Ragged, highly dissonant writing portrays the girl's struggle with death. The climax arrives with shattering power. The concerto's final section is the heart-rending *Adagio*, built from Johann Rudolf Ahle's chorale tune "Es ist genug" (It is enough) as harmonized by Bach in his Cantata BWV 60 (*O Ewigkeit, Du Donnerwort* – "O Eternity, thou thunderous word").

An air of religious meditation settles over the music. Solo violin and a quartet of clarinets (an almost organ-like sonority) alternate in presenting phrases of the chorale tune. This material is developed, with the orchestration becoming ever denser as another great climax is approached. The tension dissipates, the solo violin ascends to ethereal heights, and the concerto "to the memory of an angel" ends in a mood of profound contemplation that simultaneously gazes directly at grief, backward to Bach, and upward to heaven.

The premiere was given at a festival of The International Society of

Contemporary Music in Barcelona on April 19, 1936. Hermann Scherchen conducted the Orquestra Pau Casals, and the soloist was, of course, Louis Krasner. Krasner went on to perform the work all over Europe and the United States, securing its status as one of the staples of the repertory.

Bruckner: Symphony No.9 in D minor, WAB109 (Nowak edition)

Ⅰ Feierlich, misterioso
Ⅱ Scherzo: Bewegt, lebhaft
Ⅲ Adagio: Langsam, feierlich

Anton Bruckner: Born in Ansfelden, Austria, September 4, 1824; died in Vienna, October 11, 1896

Bruckner began drafting sketches for his Ninth Symphony in 1887, even before final revisions had been made to the Eighth. He then laid the Ninth aside and did not return to it for some time, working instead on further revisions to earlier symphonies. This predilection for revisions amounted almost to an obsession with Bruckner, and it is a sobering thought that had he not spent so much time in this activity, he might well have been able to complete the Ninth. Most of his last symphony was written in 1893 and 1894 amid rapidly deteriorating health. But he clung tenaciously to the belief that God would stand by him and allow the completion of just one more symphony. The score is dedicated "to my dear God," the finale is sprinkled liberally with entreaties written in the margins to the divine, and the physician who attended to Bruckner at this time often found him on his knees deep in prayer. The fear, despair, even outright terror Bruckner experienced during these last years inform many pages of the Ninth. He worked with heroic determination for nearly the last two years of his life on just the finale alone, right up to the day he died.

But the struggle was too much. Totally exhausted physically, mentally and spiritually, he succumbed on the afternoon of October 11, 1896 after returning from a walk in Vienna's Belvedere Park. The funeral was held in the Karlskirche, which is situated near the Grosse Musikvereinsaal, the hall where many of Bruckner's symphonies had been performed. The first performance of the Ninth Symphony — in a bowdlerized form — had to wait for more than six years after Bruckner's death (February, 1903), and for many more years after that (1932) in its original form.

The symphony opens in an aura of hushed mystery. Eight horns in unison present a shadowy motif. Such is the great span, richness and structural complexity of this colossal opening movement that one cannot properly speak of

"first theme," "second theme," etc., but rather of entire theme groups. The opening horn motif is in fact but the first of eight elements that constitute the first group alone. The beginning of the second group is easily identified by the flowing, yearning melody given to the violins in A major. The tonal center returns to grim D minor for the third group. The movement ends with a titanic struggle between two monolithic harmonic blocks: D minor (most of the orchestra) and implied E-flat major ("implied" since the third of the chord is absent), which screams forth from the piercing trumpets and high woodwinds. The rending dissonance that results creates an almost unbearable level of harmonic tension.

The Scherzo alternates between moods of nightmarish fantasy and frivolity, the latter particularly in evidence throughout the central Trio section, which bears comparison with the world of Mendelssohn's *Midsummer Night's Dream*.

The *Adagio* contains some of the most anguished and tortuous music Bruckner ever wrote, as well as some of the most resigned and serene. Lofty grandeur, monumental blocks of sound, seismic eruptions, infinitely consoling melodies, fanfares, titanic harmonic clashes and apocalyptic visions take us on a journey across an immense musical cosmos. By the end, Bruckner has found peace, the music fading radiantly, eternally, into the vastness of the cosmos.

Various attempts have been made to append a fourth movement to this symphony, based on the composer's sketches (the curious may investigate several different versions on CD). Bruckner himself, realizing that he was probably not going to have time to finish the work, even proposed using his *Te Deum* as a finale, an impractical idea as it requires a chorus, and an illogical one in harmonic terms with its C-major conclusion to a D-minor symphony. To most listeners, the ending as it stands marks a closure as emotionally fulfilling and structurally satisfying as any traditional "finale."

Michael Steinberg articulated the way many concertgoers feel in these words: "I believe that unconsciously [Bruckner] had become reconciled to the idea that the Ninth would end with its *Adagio*, whose last pages he therefore made as 'final' as he could, and more final than he would have if there had been a true finale to follow. Indeed, given Bruckner's difficulties with finales, given also how beautiful the close of his *Adagio* is, I would go so far as to say thank God he was not able to finish the fourth movement."

Robert Markow's musical career began as a horn player in the Montreal Symphony Orchestra. He now writes program notes for orchestras and concert organizations in the USA, Canada, and several countries in Asia. As a journalist he covers the music scenes across North America, Europe, and Asian countries, especially Japan. At Montreal's McGill University he lectured on music for over 25 years.

C Series

第886回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.886 C Series

東京芸術劇場コンサートホール

2019年9月8日(日) 14:00開演

Sun. 8 September 2019, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

指揮 ● 大野和士 Kazushi ONO, Conductor

ピアノ ● ホアキン・アチュカロ Joaquín ACHÚCARRO, Piano

コンサートマスター ● 山本友重 Tomoshige YAMAMOTO, Concertmaster

【日本・フィンランド外交関係樹立100周年記念】

【渡邉暁雄生誕100年記念】

シベリウス：トゥオネラの白鳥 op.22-2 (10分)

Sibelius: The Swan of Tuonela, op.22-2

(イングリッシュホルン独奏／南方総子 Fusako NAMPO, English Horn Solo)

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 op.18 (33分)

Rachmaninoff: Piano Concerto No.2 in C minor, op.18

Ⅰ Moderato
Ⅱ Adagio sostenuto
Ⅲ Allegro scherzando

休憩 / Intermission (20 分)

シベリウス：交響曲第2番 ニ長調 op.43 (43分)

Sibelius: Symphony No.2 in D major, op.43

Ⅰ Allegretto
Ⅱ Tempo andante, ma rubato
Ⅲ Vivacissimo
Ⅳ Finale: Allegro moderato

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：フィンランド大使館、東京都、東京都教育委員会

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）独立行政法人日本芸術文化振興会

FINLAND JAPAN フィンランド日本2019 100

日本・フィンランド外交関係樹立100周年記念

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演（青少年を年間500名ご招待）協賛企業・団体はP.49、募集はP.52をご覧ください。

YOUNG SEAT ヤングシート

Joaquín ACHÚCARRO

Piano

ホアキン・アチュカロ

ピアノ

©Jean-Baptiste Millot

ビルバオ（スペイン）生まれの長老ピアニスト。1959年、リヴァプール国際コンクールで優勝。以降、世界各地で演奏を続ける。ベルリン・フィル、シカゴ響、ニューヨーク・フィル、ロンドン・フィル、フランス国立管、ミラノ・スカラ座フィルなどと共演。録音も多く、『火祭りの踊り＆ゴイェスカス～スペイン音楽名演集』（Sony Classical）『ショパン：24の前奏曲』（La Dolce Volta）などをリリース。またラトル＆ベルリン・フィルと共演したDVD『スペインの庭の夜／マドリード・リサイタル』（EuroArts）がある。

1989年より南メソジスト大学（アメリカ）の名誉教授。2000年、その卓越した芸術上の功績が認められ「平和のためのユネスコ・アーティスト」に選出。2003年、当時のスペイン国王カルロス１世より国家功労十字勲章を授与された。2018年、ジュネーヴ国際音楽コンクール・ピアノ部門で審査委員長を務めた。

Joaquín Achúcarro was born in Bilbao (Spain). He won the victory at the 1959 Liverpool International Competition. He has performed with orchestras including Berliner Philharmoniker, Chicago Symphony, New York Philharmonic, London Philharmonic, Orchestre national de France, and Orchestra della Scala di Milano. Since 1989 Achúcarro holds the Tate Chair at Southern Methodist University in Dallas. He was named “Artist for Peace” in 2000 by the UNESCO. In 2003, King Juan Carlos of Spain bestowed upon him the Great Cross of Civil Merit.

シベリウス：
トゥオネラの白鳥 op.22-2

フィンランドの作曲家ジャン・シベリウス（1865～1957）の創作活動において、交響詩はきわめて重要なジャンルであった。初期の《クレルヴォ》（1892）から晩年の《タピオラ》（1926）に至るまで、シベリウスは生涯にわたりこのジャンルで創作を行い、数々の傑作を残している。伝統的な構成にとらわれない交響詩は、緻密な論理性と幻想性の融合を目指したシベリウスにとって、まさに理想的な表現形式であったといえよう。

シベリウスは交響詩の題材に、自国の民族叙事詩『カレワラ』をしばしば取り上げている。ヴァイナモイネン、レンミンカイネン、クレルヴォら、『カレワラ』に登場する英雄たちの破天荒な冒険譚に基づくファンタジックな交響詩の創作を通して、シベリウスが北欧情緒の表現のみならず、フィンランドの民族性に深く根差した独自の音楽語法を切り開いている点は特筆に値するだろう。

初期シベリウスの代表作《トゥオネラの白鳥》は、好色の英雄レンミンカイネンを題材とした4曲からなる組曲《レンミンカイネン》の中の一曲である。1890年代のシベリウスはワーグナーとリストの音楽に傾倒していたが、《レンミンカイネン》では彼らの革新的な語法を探究した成果がよく表れている。

もともと『カレワラ』を題材としたオペラ『船の建造』（未完）の序曲という形で生まれた《トゥオネラの白鳥》は、ワーグナーの『ローエングリン』前奏曲を彷彿とさせる神秘的なサウンドが特徴である。イングリッシュホルン独奏による白鳥の歌に乗せて、トゥオネラ（『カレワラ』で描かれる黄泉の国）の調べを瞑想的に奏でる一種の心象風景は、当時のフィンランド芸術界を席巻していた象徴主義の影響であろうか。弦楽器の繊細な響きを背景に、イングリッシュホルンが陰影を帯びながら揺らめくその表現は、静寂の中にも内的な緊張感をはらんでおり、ユニークの一言に尽きる。

なお、作品は1897年と1900年の2度にわたり改訂された。1900年夏に執り行われたヘルシンキ・フィルのパリ万博公演で、トロカデロ宮にて曲が披露された際は、異国情緒を好むフランス人の心を大いに捉えたという。

（神部 智）

作曲年代：1893年　改訂／1897、1900年
初　　演：1896年4月13日　ヘルシンキ　作曲者指揮　ヘルシンキ・フィル
楽器編成：オーボエ、イングリッシュホルン、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トロンボーン3、ティンパニ、大太鼓、ハープ、弦楽5部

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 op.18

セルゲイ・ラフマニノフ（1873～1943）は、稀代のメロディ・メーカーであると同時に、20世紀最高のピアニストの1人でもあった。ピアノ協奏曲第2番は、彼のこの2つの才能が存分に発揮された傑作だ。この曲は、全編にあふれる美しい旋律と華麗なピアノの技巧によって、チャイコフスキーの第1番とともに、あらゆるピアノ協奏曲の中で最も人気のある作品となっている。

この曲の作曲については特異なエピソードが残されている。1897年、心血を注いだ交響曲第1番の初演が大失敗に終わったことにショックを受けたラフマニノフは、ひどいスランプに陥ってしまい、ほとんど作曲ができなくなってしまう。彼は、友人の紹介で精神科医ニコライ・ダーリ博士（1860～1939）の診察を受ける。博士はラフマニノフに「あなたは協奏曲の作曲を始めます……作曲はたやすく進みます……協奏曲はすばらしい出来栄えとなります」という暗示をかけた。最初は半信半疑だったラフマニノフだが、治療を継続するうちにその効果が表れ、1901年、ついに彼はこのピアノ協奏曲を完成する。感謝の意をこめて、彼はこの曲を博士に献呈した。

作曲者が自らピアノを弾いた初演は大成功を収めた。この曲の憂愁に満ちた旋律美は多くの人々の心をとらえ、すぐに世界中で演奏されるようになる。現在でも、様々な形に編曲されたり、映画やテレビドラマに使用されたりして、クラシック音楽の枠を超えて親しまれている名曲だ。

第1楽章　モデラート ハ短調　2分の2拍子　ソナタ形式　鐘の音を思わせるピアノの和音連打が次第に高まり、弦とクラリネットによる情熱的な第1主題が登場する。甘美で抒情的な第2主題はピアノが提示する。

第2楽章　アダージョ・ソステヌート　4分の4拍子　ホ長調　三部形式　夢見るような旋律が歌われる緩徐楽章。中間部はテンポが速く、楽章の山場を作る。

第3楽章　アレグロ・スケルツァンド　ハ短調～ハ長調　2分の2拍子　2つの主題に基づく自由な形式のフィナーレ。ヴィオラとオーボエが奏する副主題は、ラフマニノフの作品で最もよく知られた美しい旋律である。

（増田良介）

作曲年代：1900～01年

初　　演：1901年11月9日（ロシア旧暦10月27日）　モスクワ　作曲者独奏
アレクサンドル・ジロティ指揮　フィルハーモニー協会管弦楽団

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、弦楽5部、独奏ピアノ

シベリウス：
交響曲第2番 ニ長調 op.43

1809年から100年あまりの間、フィンランドは東の隣国ロシアに支配されていた。当初、フィンランドには大幅な自治権が与えられていたが、ドイツ帝国の誕生（1871）や独墺伊三国同盟の締結（1882）など、国際情勢が変化するとロシアは危機感を強め、フィンランドへの引き締めを行うようになる。そしてついにはフィンランドの自治権を全面的に奪う方向に舵を切り（1899年に発布された「2月宣言」）、これまで着々と築き上げてきたフィンランドの社会システムを根底から覆そうとした。

そうした状況下、フィンランドでは国家独立に向けて人々の民族意識が高揚していく。1890年代に本格的な創作活動を開始した若きジャン・シベリウス（1865～1957）も、影響力のある一人の芸術家として、自国の文化的ナショナリズム運動に参加。愛国的作品の数々を世に送り出している。1900年に初演された交響詩《フィンランディア》は、その代表的な作品だ。しかしながら《レンミンカイネン》の作曲以降（初演は1896年）、シベリウスは『カレワラ』などを題材とした交響詩の創作に加え、純粋な絶対音楽の領域にも活路を見出すようになる。その最大の成果が、1899年から1924年にかけて次々と発表された7つの交響曲である。

シンフォニストとしてのシベリウスが交響曲のジャンルで求めた音楽表現は交響詩のそれと本質的に異なり、きわめて抽象度の高いものであった。実際シベリウスの7つの交響曲においては、声楽の導入はおろか、タイトルや標題の類もいっさい退けられている。そこでは純粋器楽による抽象的な形式構成を生み出そうとした作曲者のストイックな思索の足跡が、はっきりと認められるのである。シベリウスは晩年、「私の交響曲はひとつひとつが独自のスタイルを持っています。それらを生み出すために長い時間を要し、多くの困難を乗り越えなければなりませんでした」と述べたという。上記の言葉通り、シベリウスの交響曲はそれぞれが個性的であり、7曲すべてがユニークな傑作として人々に愛されている。その中でも群を抜いて人気があり、演奏機会がもっとも多いのは、《フィンランディア》の2年後に発表された交響曲第2番であろう。

シベリウスが交響曲第2番の創作に集中したのは、1901年夏から翌02年初頭にかけてであった。作曲に着手する直前、シベリウスは創作のインスピレーションを得るべく、家族とともにイタリアのラパッロという町に滞在していた。そのため、南欧の明るく田園的な雰囲気が曲調に反映しているといわれる。だがこの交響曲は、決して穏やかな気分（第1楽章冒頭）に終始するわけではない。悲劇的

な葛藤（第2楽章）、嵐のようなうねりと静穏（第3楽章）、そして精神の高揚や英雄的なファンファーレ（第4楽章）など、作曲者の優れた筆致によって、あらゆる表現の限りが尽くされるのである。

とりわけ注目されるのは、「明」と「暗」の世界の相克を通して輝かしい勝利へと導かれる交響曲の終結部であろう。この作品を耳にした当時のフィンランドの聴衆は、「暗」の要素をロシアの政治的弾圧に喩え、「明」が「暗」を乗り越えて力強く終結するフィナーレの内に、自分たちの「未来への希望」を重ね合わせたという。交響曲において抽象的な表現を目指したシベリウスが、見え透いた標題的解釈を喜ぶことはなかった。しかし交響曲第2番の表現世界は「作曲者の意図」をはるかに超え、今なお人びとの心に訴えてやまない多様なメッセージを含み持っている。それが、この交響曲の傑作たる所以であろう。

第1楽章　アレグレット　展開部の巨大なクライマックスに比重が置かれたソナタ形式。冒頭に登場する3度上行「Fis−G−A（嬰ヘ−ト−イ）」の動きは、交響曲全体を統一する重要な要素として働く。

第2楽章　テンポ・アンダンテ、マ・ルバート　展開部と再現部が融合した重厚なソナタ形式。激しい起伏を伴うドラマティックな緩徐楽章。

第3楽章　ヴィヴァーチッシモ　抜群の推進力を持つ弦楽器の旋律と、オーボエ・ソロによる穏やかな旋律が交互に現れる。最後は徐々に高揚しながら、アタッカで勇壮なフィナーレへと流れ込む。

第4楽章　フィナーレ／アレグロ・モデラート　「明」と「暗」を象徴する2つの主題の性格的対比が顕著なソナタ形式。曲の終盤では、執拗に繰り返される短調の第2主題が大きなうねりを形成していくが、その頂点で主調のニ長調に転ずると、壮大なクライマックスを迎える。

（神部 智）

作曲年代：1901～02年
初　　演：1902年3月8日　ヘルシンキ　作曲者指揮　ヘルシンキ・フィル
楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、弦楽5部

Program notes by Robert Markow

Sibelius: The Swan of Tuonela, op.22-2

Jean Sibelius: Born in Hämeenlinna (Tavastehus), Finland, December 8, 1865; died in Järvenpää, near Helsinki, September, 20, 1957

Throughout most of his creative life, Sibelius made a conscious effort to stir the Finnish people to patriotic thoughts and deeds through the medium of music. In 1893, he decided to write an opera (*The Creation of the Boat*) based on a passage from the great Finnish epic, the *Kalevala*. The opera was eventually abandoned, but the intended prologue to it became the famous symphonic poem *The Swan of Tuonela*. Over the next two years, Sibelius wrote three more orchestral pieces inspired by the exploits of the *Kalevala*'s great hero, Lemminkäinen. Collectively, these works became known as the Four Legends, which were performed together for the first time on April 13, 1896, conducted by the composer.

The Swan of Tuonela became the second in this series, but loses nothing by being played separately. The score bears the following inscription: "Tuonela, the land of death, the hell of Finnish mythology, is surrounded by a large river with black waters and a rapid current on which the Swan of Tuonela floats majestically, singing." The English horn sings the doleful but intensely lyrical swan melody, set against a magical string background (divided into seventeen separate parts at times, most of them played with mutes) and answered by a rising line for the solo cello. A bleaker, more lugubrious piece of music can scarcely be imagined, but it is so effective that it has become one of Sibelius' most famous works.

Rachmaninoff: Piano Concerto No.2 in C minor, op.18

Ⅰ Moderato
Ⅱ Adagio sostenuto
Ⅲ Allegro scherzando

Sergei Rachmaninoff: Born at Oneg (an estate near Novgorod), April 1, 1873; died in Beverly Hills, California, March 28, 1943

Rachmaninoff's Second Piano Concerto, one of the most beloved in the entire repertory, had a strange genesis. The harrowing experience of the utter failure of the composer's First Symphony (1897) had plunged him into deep melancholy, and he shunned both the social and musical worlds. He finally consented to see a Dr. Nicolai Dahl, who had acquired a reputation for successfully treating nervous disorders through hypnosis and auto-suggestion. By inducing Rachmaninoff to repeat over and over phrases such as "You will be begin to write

your concerto ... You will work with great facility ... The concerto will be of excellent quality ...” while in a hypnotic daze, the young composer’s creative impulses were recharged.

The second and third movements were ready for performance on December 15, 1900, and the first complete performance took place on November 9 of the following year. On both occasions, Rachmaninoff was the soloist, and the conductor was his cousin and former teacher Alexander Siloti. The score bears a dedication to the man who had made it all possible, Dr. Dahl. Popular success was immediate. Through its sweeping melodies, extravagant grandeur, melancholy and passion, Rachmaninoff’s Second Piano Concerto makes an unabashed appeal to the emotions, and justifiably qualifies as the most popular piano concerto of the twentieth century.

Following the piano’s opening chords, violins give forth the broadly flowing first theme with the piano as accompaniment. The soloist presents the warmly lyrical second theme in E-flat major. Although the piano writing is overtly virtuosic, there are also numerous passages where the soloist assumes the role of accompanist.

The second movement is in E major, a remote key from the concerto’s basic tonality of C minor. However, the movement begins in the latter key, only later moving to E major. Following a few chords in the muted strings, the solo clarinet, accompanied by the piano, intones the movement’s principal melodic idea, which surely ranks as one of the most ineffably beautiful ever written. During the thematic working out the pace quickens. After a brief cadenza, we hear once more that memorable theme in the violins. For a coda, the piano plays a new thematic idea in block chords, accompanied by left-hand arpeggios and triplets in the woodwinds. The movement closes in serene peace.

The third movement, dramatic and colorful like the first, also has two themes, the first militaristic and noble, announced by the soloist; the second broadly lyrical, heard first in the violas and oboe. The movement incorporates a *fugato* based on the movement’s main theme. First violins alone state the theme lightly and softly; the piano answers almost immediately and continues while other instruments take turns at the theme. Both themes are worked out in various additional ways and the concerto ends in a blaze of virtuosity.

Sibelius:
Symphony No.2 in D major, op.43

Ⅰ Allegretto
Ⅱ Tempo andante, ma rubato
Ⅲ Vivacissimo
Ⅳ Finale: Allegro moderato

Jean Sibelius: Born in Hämeenlinna (Tavastehus), Finland, December 8, 1865; died in Järvenpää, near Helsinki, September 20, 1957

Sibelius composed his Second Symphony — the most frequently performed of the composer's seven symphonies and the longest as well by a good margin — mostly in Italy during the spring of 1901. The first performance took place the following year on March 8 with the Helsinki Philharmonic, Sibelius conducting. This symphony stands proudly as one of the most magnificent creations in the orchestral repertory. Its success and popularity can be attributed to tensions arising from opposing elements of the score, the contrasts of mood, the continuous control of pace, the fusion of its component parts into an organic whole, and the vast sweep of its trajectory from humble beginnings to mighty apotheosis.

The first movement opens with softly throbbing chords in the lower strings. This and several motifs heard in rapid succession make up the first theme group. Sibelius is concerned not so much with long, broadly-arched themes as he is with arranging small fragments into a coherent whole as the movement unfolds. A second, contrasting group begins with an oboe solo consisting of a sustained note followed by a flourish at the end. The commentaries of numerous distinguished musical analysts differ widely in their interpretation of this movement's form; perhaps it is best simply to let Sibelius' own comment serve to work on a subliminal level. He once described the symphonic process as follows: "It is as if the Almighty had thrown down pieces of a mosaic from Heaven's floor and asked me to put them together." The listener might also consider how often the three-note rising figure of the very opening motif is integrated, in both the ascending and descending forms, into most of the other motifs as well.

The second movement is drawn in somber colors. A chant-like theme given initially to two bassoons in octaves over a pizzicato bass accompaniment is answered by a complementary theme for oboes and clarinets. Among the many themes and fragments Sibelius uses in this movement is a highly characteristic effect consisting of a loud chord (often in the brass) which diminishes in strength and ends with a mighty crescendo to even greater volume than before.

The Scherzo might best be described as a whirling blizzard of sound. The central Trio section provides the greatest possible contrast in its idyllic, pastoral melody sung by the oboe. The furious Scherzo is then repeated in modified form, followed by a return of the Trio, now shortened, which acts as an extended bridge passage to the Finale. As in Beethoven's Fifth, the third and fourth movements are directly connected, with the Finale's majestic, chorale-like first theme arising from transitional material connecting the movements. Sibelius covers much emotional territory in this movement. In contrast to the optimistic, affirmative opening, a distinct mood of gloomy turbulence is created at several points by darkly swirling ostinatos in the lower strings. Resolution, triumph and glory inform the massive final pages of the symphony as the brass intone the magnificent chorale theme for the last time.

For a profile of Robert Markow, see page 13.